

愛知県新城市作手方言



愛知県方言区画図

【愛知県の方言区画】愛知県は、その名も境川によって、尾張地方と三河地方に分けられる。その言語についても、この旧国境（くにざかい）は現在に至っても大きな境界線となっている。

県西部の尾張地方は、この地方の中核都市である名古屋を擁し、言語文化に対する歴史も長く、近隣地域、特に岐阜県美濃地方への影響力は強いものがある。語彙では、「止める」の意味の「オク」や「騒がしい」の意味の「ソーマシー」が、愛知県尾張地方では用いられるが、同じ語は岐阜県美濃地方に見られても、愛知県三河地方には見られない（三河では、順に「ヤメル」「サワガシー」である）。また、音韻に関しても、名古屋の特徴であり岐阜県美濃地方でも広く見られる連母音の融合が、三河地方では/ai/→[e:]を除いては、基本、見られない。このように、愛知県尾張地方は、その差において、岐阜県美濃地方に近似し、愛知県三河地方との差異を大きく呈するものとなっている。

一方の三河地方は、旧加茂郡、旧碧海郡、旧額田郡、旧幡豆郡からなる三河西部と、旧北設楽郡、旧南設楽郡、旧八名郡、旧宝飯郡、旧渥美郡からなる三河東部とに、言語的にも分けられる（ただし、旧宝飯郡のうち、現在の蒲郡市は三河西部の性質が強く表れる）。三河西部では、尾張地方と同

じく、「すっぽん」を「ドチ」、「おまえ」を「オマハン」と言うが、三河東部では、それぞれ「ドーツン」「オレ」という（芥子川 1983）。また、行政的に尾張地方に含まれる知多半島南部は、三河西部の性質をもっている。

名古屋は、戦後、人口増大にともない、県内外から新規住民を取り込んできたせいで、純粋な名古屋方言がほとんど聞かれなくなっている。

【新城市作手方言について】今回報告する新城市作手方言は東三河方言に属する。作手地区は、2005年まで南設楽郡の村として独立した行政をおこなっていたが、現在は、新城市となっている。

東三河方言は、形容詞のアクセントが、東京と同じく2型に分類され、「赤い」は平板型、「青い」は中高型となる。また、形容詞の活用も、関西方言に通じる「赤う（アコー）」等の形が一般的に東三河では用いられず、「赤く」のように「ク」の音が入る。そのため、意識としては「標準語に近い」という感覚を有している。

一方で、推量は伝統的に「ダラー」、あるいは「ズラ」が用いられ、勧誘表現としても尾張の「(行) コマイカ」とも異なる「(行) カマイカ」が用いられるなど、特徴もある。さらに、聞き手が知らないことでも、「私って〇〇ジャン？」と述べて話の前提を作ることから、尾張方言話者とは談話上の齟齬も生じる。活用に関しても、岐阜県東濃地方から続く、一段型動詞（「見る」・「起きる」・「開ける」類）のr語幹（ラ行五段活用）化現象が見られる。たとえば、「見る」の否定形は「見ラン」となり、軽い命令を表す形は「見リン」となる。後者は、ラ行五段活用の学校文法で言う連用形「見リ」を含むと考えられる。この「見リン」（学校文法の五段動詞は「書キン」など）は、この地域の特徴的な表現法として、若い人にも広く用いられている。

【表記について】尾張地方のような、共通語に存在しない中間的な母音もなく、また子音に関しても、大きな特徴はないため、共通語の表音的カタカナ

と同様の表記を用いる。

基本的に体系記述をおこない、それを現地調査によ

【調査概要】2010年刊行の『作手村誌本文編』を

り確認した。

愛知県新城市作手方言の活用表

《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カキン	ミョー ミン △ミリン	コイ キン 《オイデン》	セロ ショー セー シロ シン セリン
	禁止	カクナ カカンドキン	ミルナ ミンドキン	クルナ コンドキン	スルナ シンドキン センドキン
	意志 推量	カカー カクラ カクダラ カクズラ	ミョー ミルラ ミルダラ ミルズラ	コヨー クルラ クルダラ クルズラ	シヨー スルラ スルダラ スルズラ
接 続 類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カイテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カキャ (一) カイタラ	ミリヤ (一) ミタラ	クリヤ (一) キタラ	スリヤ (一) セリヤ (一) シタラ
派 生 類	否定	カカン カカヘン カカセン	ミン ミラン ミーヘン ミヤセン	コン コーヘン コヤセン	セン シン シヤーセン シーヘン セーヘン セヤーヘン
	丁寧	カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス カカセル	ミサス ミサセル	コサス コサセル	サス サセル
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能	カケル カケレル	ミレル	コレル	《デキル》 《デキレル》
	尊敬	カカレル	ミラレル	《オイデル》 《ミエル》	(欠)
	継続	カイトル	ミトル	キトル	シトル
	希望	カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクダ	ミルダ	クルダ	スルダ

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak·u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik·uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」。
g	嗅ぐ kag·u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das·u	ダイ-タ	イ音便形が存在し、sをiにする。
t/c	立つ tac·u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin·u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob·u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom·u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir·u	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
w/ø	買う ka(w)·u	カッ-タ	wをQ(促音)にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生 [ガクセー] (だ)
終 止 類	断定非過去	アカイ	シズカダ	ガクセーダ
	断定過去	アカカッタ	シズカダッタ	ガクセーダッタ
	推量	アカイラ アカイズラ アカイダラ	シズカズラ シズカダラ	ガクセーズラ ガクセーダラ
接 続 類	連体非過去	アカイ	シズカナ	ガクセーノ
	連体過去	アカカッタ	シズカダッタ	ガクセーダッタ
	中止	アカクテ	シズカデ	ガクセーデ
	仮定	アカキヤ アカケリヤ アカカッタラ	シズカナラ シズカダッタラ	ガクセーナラ ガクセーダッタラ
派 生 類	否定	アカクナイ アカカーナイ	シズカジャ (一) ナイ	ガクセージャ (一) ナイ
	なる	アカクナル	シズカニナル	ガクセーニナル
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	のだ	アカイダ	シズカナンダ	ガクセーナンダ

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」と基幹一段型(以下「一段型」)がある。おおよそ、多段型にはa類(「書く」・「居る」・「死ぬ」類)動詞、一段型にはb類(「見る」・「起きる」・「開ける」類)動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ段の4形、および、音便形がある。基幹が後接の接辞と融合してア段拗音になることもある。「カク」(書く)の場合、カカ-ン(kak·a-N)、カキ-ン(kak·i-N)、カク(kak·u)、カケ(kak·e)、カイ-タ(kai-ta)、カキヤ(kakja < kak·e-ba)

など。また、語幹末子音には、k(カ行)、g(ガ行)、s(サ行)、t(タ行)、n(ナ行)、b(バ行)、m(マ行)、r(ラ行)、w(ワ行)がある。

一段型には、ミ-ル(mi-ru)、オキ-ル(oki-ru)など基幹がイ段の動詞と、ネ-ル(ne-ru)、アケ-ル(ake-ru)など基幹がエ段の動詞がある。一段型の動詞は、「ミル」を例にすると、断定非過去形ミ-ル(mi-ru)、仮定形ミ-リヤ(mi-rja)、受身形・尊敬形ミ-ラレル(mi-rareru)、可能形ミ-レル(mi-reru)のほか、否定形ミ-ラン(mi-raN)において、rで始まる接辞が付き、かつ、多段型のr語幹動詞に対応した形となる。ただし、否定形のr語幹化形は、現在ではほぼ

「ミラン」のみで、語彙的に限定されている。

不規則な活用をする動詞に「クル」(来る)と「スル」(為る)がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キ-タ(k-i-ta)、ク-ル(k-u-ru)、コイ(k-o-i)などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段に、「スル」は、サ-レル(s-a-reru)、シ-タ(s-i-ta)、ス-ル(s-u-ru)、セロ(s-e-ro)などのように、基幹が「サ」「シ」「ス」「セ」の4段にわたる。命令形がセロ、ショー(sjoR < *s-e-jo)となる点で特徴的である。

(2)各活用形の特徴

特徴的な形式は、推量で「ズラ」「ダラ」「ラ」が用いられる点、否定で「ン」「ヘン・セン」が用いられる点、「のだ」の準体助詞が省略されて「連体形+ダ」となる点の、3点に見られる。

〈断定非過去形〉

断定非過去形、連体非過去形は同形で、「書く」「見る」「来る」「する」は、「カク」「ミル」「クル」「シル」となる。

- ・おばあさんとう、顔を見にくるか。(おばあさんたち、顔を見に来るか。)(村誌)

〈断定過去形〉

断定過去形、連体過去形は同形で、多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」「する」はそれぞれイ段形「キ」「シ」に「タ」を後接した形となる。

- ・わしゃあ、まあ、涙がでたに。(私は、もう涙が出たよ。)(村誌)
- ・転んだいきに、手をついたもんで、肩の骨にもひびがはいっちゃってやあ。(転んだひょうしに手をついたから、肩の骨にもひびが入ってしまったね。)(村誌)

〈命令形〉

多段型動詞は、「カケ」のようなエ段形のほか、軽い命令の形として「カキン」のような「基幹イ段形+ン」も命令という機能をもって用いられる。一段型動詞は、基幹(=語幹)に「ヨ」が付いて得られるが、1音節にまとまり拗音化する。伝統的には、r語幹動詞に対応した「基幹(=語幹)+リン」の形も命令形として用いられてきたが、「見リン」を除き現在ではほぼ廃れている。「来る」については、「コイ」「キン」のほか補充形「オイデン」も用いられ、

「する」については、「セロ/ショー/セー/シロ」に加え「シン」「セリン」も用いられるなど、多様な形式が見られる。

- ・ばあちゃん、転ばんようにせりんよ。(おばあちゃん、転ばないようにしなよ。)(村誌)

〈禁止形〉

共通語と同じく、終止類断定非過去の形に「ナ」を付けて得られる形が、基本的に用いられる。

- ・でほゆうなよ。(でたらめを言うなよ。)(村誌)

ただし、この形は、親が子どもに言う場合などに限られるほどきつく、一般的には、否定形に「テ+動詞」「オク」の命令形「オキン」を組み合わせた「トキン」を付加した形が用いられる。

- ・でほゆわんどきんよ。(でたらめを言うなよ。)

〈意志形〉

多段型動詞の意志形はア段長音「カカー」となる一方、一段型動詞については、「見ヨー」のように基幹+ヨーの形が用いられるが、「ツキヨー」(付けよう)のように基幹+ヨーが縮約した形をとる場合もある。また、「来る」「する」については、「コヨー」「ショー」など。

- ・うちじゅうで気よつきょうって、ゆっとるだに。(家中で気を付けようと言っているんだよ。)(村誌)

また、さらに「カカートオモー」、「ミートオモー」、「コヨーオモー」、「シートオモー・セートオモー」のように、「トオモー(と思う)」を続けることもある。

〈推量形〉

伝統的には、断定非過去形に「ラ」を付けて推量を表すが、壮年層以下においては、三河地方で広く使われる「ダラ」「ズラ」が用いられることもある。

- ・まんだ時間があるだらあ。(まだ時間があるでしょう。)(村誌)

「ダラ」「ズラ」と「ラ」の使い分けについては、『作手村誌 本文編』に、「ダラ」「ズラ」が根拠がある推量、「ラ」が根拠があまりない単なる推量と説明があり、それぞれ、共通語の「のだらう」「だらう」に相当するとあるが、現在では、「ダラ」が「のだらう」「だらう」の両方に用いられることがある。

過去推量は、断定過去形に「ダラ」「ズラ」を付ける。

- ・おどけただら一。(驚いたでしょう。)(村誌)
- ・昨日は雨が降ったずら。(昨日は雨が降っただらう。)(村誌)

さらに、過去推量は、高年層で、「ツラ」が用いられる。

- ・昨日は雨がフツツラ。(昨日は雨が降っただらう。)(村誌)

推量形は、上昇イントネーションで確認の用法となる。

〈連体非過去形〉

断定非過去形に同じ。

- ・むこうで芝居見ながら酒飲んで、けえって来るときにゃ、べろべろで。(向こうで芝居を見ながら酒を飲んで、帰ってくるときにはへべれけで。)(村誌)

〈連体過去形〉

断定過去形に同じ。

- ・こっちへ越してきたつれのうちがあへのへにあるつちゆって(こちらに引っ越してきた友人の家があへの辺りにあると言って)(村誌)

〈中止形〉

中止形は、共通語と同様、多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」「する」はそれぞれイ段形「キ」「シ」に「テ」を後接した形となる。一段型動詞のr語幹化形「見りて」はない。

- ・救急車が来て、〇ちゃんはちゃんと話もできるで、待ってってねって。(救急車が来て、〇ちゃんはちゃんと話もできるから、待っていてねって。)(村誌)
- ・むこうで芝居見ながら酒飲んで、けえって来るときにゃ、べろべろで。(向こうで芝居を見ながら酒を飲んで、帰ってくるときにはへべれけで。)(村誌)

〈仮定形〉

仮定形は、多段型動詞は「カキヤ」などア段拗音、一段型動詞は基幹(=語幹)に「リヤ(一)」を付けた形になる。「来る」「する」はそれぞれ、「クリヤ(一)」「スリヤ(一)」「セリヤ(一)」が用いられる。

- ・おえに上がってもらやあいいじゃねいか。(部屋に上がってもらえばいいじゃないか。)(村誌)

- ・ベットにおるのを見りやあ、おとましいがえん。(ベッドにいるのを見れば、かわいそうじゃないか。)(村誌)

また、「カイタラ」「ミタラ」など「タラ」を付けた形もある。

〈否定形〉

否定形は、多段型動詞は「ア段形+ン」、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ン」を付けた形になる。ただし、前述のとおり、一段型動詞はほぼ「見る」に限って、「基幹+ラン」の形「ミラン」が使われる。

- ・自分はうらからだで気がつかんでやあ。(自分は後ろから(車にぶつかられた)ものだから気がつかなくて。)(村誌)

やや強意的な意味を含む否定として、多段型動詞の場合「ア段形+ヘン/セン」が用いられる。一段型動詞の場合は、基幹の長音形に「ヘン/セン」を付けた形のほか、基幹(=語幹)に「ヤセン」が付く形も用いられる。

否定過去形には、多段型動詞は「ア段形+ン」に「ナンダ」、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ナンダ」を付けた形を用いる。

- ・わしやがじゃあ、ちっとも知らんでやあ。(私は、少しも知らなかったなあ。)(村誌)

やや強意的な意味を含む否定として、多段型動詞の場合「ア段形+ヘンダ/センダ」、一段型動詞は基幹(=語幹)の長音形に「ヘンダ/センダ」を付けた形語形も用いられる。

- ・楽しみなんか、ありやあせんだで、芝居が楽しみでやあ。(楽しみなどなかったから、芝居が楽しみでね。)(村誌)

〈丁寧形〉

伝統的には用いられない。調査の範囲では、特に丁寧の意味を含む終助詞も見られなかった。

〈使役形〉

多段型動詞は「ア段形+ス/セル」、一段型動詞は基幹(=語幹)に「サス/サセル」を付けた形になる。「～(サ)ス」は多段型、「～(サ)セル」は一段型に活用する。どちらも差が無く用いられるが、過去形では「～シタ」が好まれるようである。

- ・またゆっくり寄らしてもらうでえん。(またゆっくり寄らせてもらいますよ。)(村誌)
- ・ここでご無礼させてもらうてん。(ここで失礼

させてもらいますよ。)(村誌)

〈受身形〉

「カカレル」「ミラレル」「コラレル」「サレル」のような形が使われる。この形は、一段型動詞に準じた活用をする。

- ・やかましくゆわれとるが、だだくさもない。
(やかましく言われているが、(畑の作業は)たくさんもない。)(村誌)

〈可能形〉

多段型動詞は、エ段形にル(語幹に eru)が付いた「カケル」も用いられるが、より一般的には「レル」が付いた「カケレル」の形が使われる。一段型動詞は基幹(=語幹)に「レル」が付いた「ミレル」の形が用いられる。「来る」については「コレル」が用いられ、「する」は、「デキル」のほか、老年層で「デキレル」も聞かれる。

- ・ソノ日ワ 用ガアッテ行ケレン。(その日は用があって行けない。)

一段型動詞と「来る」は、基幹に「レル」が付いた「ミレル」「コレル」が使われる。「する」は「デキル」が用いられるが、ほかに「デキレル」も聞かれる。

- ・つれは道の方を向いておったむんで、とっさによくれたが、(友だちは道の方を向いていたので、とっさに避けられたけれど)(村誌)

可能には、情動的に不可能であることを表す「ヨーカカン」のような「ヨー+否定形」も使われる。反語以外の肯定可能で用いられることはない。

不可能の表現としては、多段型動詞は「イ段形+エン」、一段型動詞は基幹(=語幹)に「エン」を付けた形も用いられる。

- ・トテモジャナイガ、イキエン。(とてもではないが、私は行くことができない。)

さらに、副詞「ヨー」を前に置き「ヨーイキエン」などとすると、能力や状況から不可能であることを表す。へりくだっているとの意識もある。一方、「ヨーイカン」は、情動的に不可能である場合に用いられる。

- ・ソナ ムツカシー カンジ、ヨー カキエン。(そんな難しい漢字は、書けない。)
- ・ワタシワ ジガ ヘタダモンデ、ヨー カカ。(私は字が下手だから、書けない。)

〈尊敬形〉

目上の人に対しては、「オ+イ段形+ル」「オ+基幹+ル」を用いる。「オ+イ段形+ル」「オ+基幹+ル」は、全体で一段型活用となり、「オイキル」「オイキタ」のように用いられる。

- ・気を付けてお帰りておくれましよう。(気を付けてお帰りください。)(村誌)

ただし、多段型動詞でもすべての動詞に当該の活用形が見られるわけではないとする世代もあり、また、一段型動詞での使用例は、今回の調査に限っては得られなかったことから、衰退が激しい形式と考えられる。

ただし、「来る」に対する尊敬形「オイデル」「ミエル」は広く用いられる。

- ・ようおいでたね。(ようこそいらっしやいました。)(村誌)

〈継続形〉

継続は、多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」「する」はそれぞれイ段形「キ」「シ」に「トル」を後接した形で表され、進行と結果の形が区別されない。

- ・わしんとも、とうしそんな話をしとるぞん。
(私の家でも、いつもそんな話をしているよ。)(村誌)

- ・おとっさんは畑に行とるしやあ。(お父さんは畑に行っているしね。)(村誌)

進行を表す「ヨル」は用いられない。

〈希望形〉

共通語同様、「タイ」を付加して得られる。

- ・マー、カエリタイ。(もう帰りたい。)

三人称が主語の場合には、「タガル」を用いる。

- ・マー、カエリタガトル。((彼は)もう帰りがっている。)

〈のだ形〉

連体非過去形・連体過去形に直接、「ダ」が付くことによって得られる。説明的な態度を表したり、多く、終助詞を伴って、文脈から再解釈されることを表したりする。

- ・救急車呼んだりはしてくれただよ。(救急車を呼んだりはしてくれたんだよ。)(村誌)

- ・ユキ、フツル。マー、フユガ キタダナー。
(雪が降っている。もう、冬が来たんだなあ。)

次のような部分否定の用法もある。

- ・そんなずくがあるじゃあないでやあ。(そんなに元気があるわけじゃないからね。) 村誌

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

基本的に、共通語と同じ活用をする。尾張地方とは異なり、学校文法の連用形にあたる「ク」は省略されない。

〈断定非過去形〉

語幹に「イ」を付す。連母音の融合はしない。

- ・なんたらことだん。おそがいのんほい。(何と
いうことでしょう。恐いことですね。) 村誌

〈断定過去形〉

語幹に「カッタ」を付す。

- ・ねえさん、わるかったのん。(〇〇さん、悪か
ったわねえ。) 村誌

〈推量形〉

現在推量については、断定非過去形に「ラ」を付す。過去の場合には、断定過去形が「カッタ」となるのに対し、推量過去形は「カツラ」となる。

- ・アシタワ、サムイラ。(明日は寒いだろう。)
- ・足を折ったって聞いたが、痛かつつらのん。
(足を折ったと聞いたが、痛かつたらう
ね。) 村誌

結果から根拠を推論する場合には、「ズラ」「ダラ」を用いる。ただし、この場合に「ラ」を用いてもよいとの証言もあり、必ずしも使い分けが厳密でないようである。

〈連体非過去形〉

断定非過去形と同じ。

- ・なんたら優しい子だらあ。(なんという優しい
こでしょう。) 村誌

〈連体過去形〉

断定過去形と同じ。

〈中止形〉

共通語と同じく、語幹に「クテ」を付す。

- ・見りゃあ見たで、おとましくて、気をやむし
のん。(見れば見たで、かわいそうで気を病
むしね。) 村誌

〈假定形〉

語幹に「キャ」「ケリャ」「カッタラ」を付す。

- ・そんなに寒きや、服をお着りん。(そんなに寒
ければ服を着なさい。)

〈否定形〉

「語幹＋ク」に「ナイ」を付す。

- ・キョーワ、サムクナイ。(今日は寒くない。)
- また、やや強意的な意味を含む「語幹＋カ(一)
ナイ」も、老年層を中心に用いられる。

- ・キョーワ、サムカーナイ。(今日は寒くはない。)

〈なる形〉

「語幹＋ク」に「ナル」を付す。

- ・こんねに遅くなって、よくもないだが受けと
ってくれん。(こんなに遅くなって、よくも
ないのだが、受けとってください。) 村誌
- ・さぶくなったが、まめそうなのん。(寒くなっ
たけれど、元気そうですね。) 村誌

〈丁寧形〉

あいさつで「ございます」を用いるが、一般的ではない。

- ・オサムーゴザイマス。(お寒うございます。)

〈のだ形〉

動詞と同じように連体形に「ダ」を付加して得られる。機能は、動詞と同じ。

- ・それがよかつただぞん。(それがよかつたんだ
よ。) 村誌

【形容名詞述語・名詞述語】

指定辞(いわゆる断定の助動詞)は「ダ」である。

〈断定非過去形〉

形容名詞・名詞に「ダ」を付す。

- ・大丈夫だよ。(大丈夫だよ。) 村誌

ただし、接続助詞「ガ」の前では、「ナ」の形も見られる。

- ・そりゃあ、そうなが(そりゃ、そうだよ。) 村
誌

〈断定過去形〉

「ダッタ」を用いる。

- ・そいでも、やられたうちの人が文句をゆわん
で、おおまえだったちゅーか、いい時代だ
っただぞ。(それでも、(いたづらを)された
家の人が文句を言わないで、鷹揚だったとい
うか、いい時代だったんだよ。) 村誌

〈推量形〉

「ダラ」が用いられる。「ダラー」と末尾母音が長音化することもある。

- ・なんたら優しい子だらあ。(なんという優しいこでしょう。)(村誌)

「ズラ」「ダラ」には、通常の推量の他に、確認要求の用法もあり、聞き手に確認しながら話を進める際に用いられる。

- ・息子もおかあさんも会社だらあ。ほいでも、今じゃあ、便利だのん。その子が携帯で△ちゃんにおそえてくれて、ほいから、また、じきに電話くれて(息子もおかあさんも会社にいるでしょ、それでも今は便利だね、その子が携帯電話で△ちゃんに教えてくれて、それから、またすぐ電話をくれて、)(村誌)

〈連体非過去形〉

形容名詞は、「ナ」を介して名詞を修飾する。

- ・坊の好きなものでも買ってあげておくれん(村誌)

名詞と名詞は、「ノ」で結ばれる。

- ・裏のかなぎの山がぼろくそになって(村誌)

〈連体過去形〉

断定過去形と同じ。

- ・フーン、ソーダッタダカン(ふうん、そうだったのか)(村誌)

〈中止形〉

「デ」を用いる。

- ・運転しとったのは作手のしとじゃなくて、世間のしとでやあ(運転していたのは作手の人ではなくて、他所の人でね)(村誌)

〈仮定形〉

「ナラ」「ダッタラ」を用いる。

〈否定形〉

「ジャ(一)ナイ」の形を用いる。

- ・運転しとったのは作手のしとじゃなくて、世間のしとでやあ。(運転していたのは作手の人ではなくて、他所の人でね。)(村誌)

〈なる形〉

「ニナル」の形を用いる。

- ・こいであんきになった。(これで気が楽になった。)(村誌)

〈丁寧形〉

デスを付けるのは共通語的な用法であり、この地

方では、伝統的に、述語自体に丁寧形はない。

〈のだ形〉

共通語の「～なのだ」に相当する形式は、「～ダダ」「～ナダ」となるはずだが、実際には用いられない。

ただし、非過去の形で「名詞+なのですか」に相当する場合、「名詞+ダカン」が用いられる。疑問文で用いられて、強く説明を求める態度(疑い)を表す。

- ・ホントニ、アナタワ、ツクデノ ヒトダカン?
(あなたは、本当に作手の人なのですか。)
- ・おまえだったちゅうか、いい時代だっただぞ。(気前がいいというか、良い時代だったんだよ。)(村誌)

用例出典

村誌：作手村誌編集委員会(2010)『作手村誌 本文編』愛知県新城市

参考文献

芥子川律治(1983)「愛知県の方言」『講座方言学 8 中部地方の方言』国書刊行会
作手村誌編集委員会(2010)『作手村誌 本文編』愛知県新城市

謝辞

同地出身の昭和女子大学 嶺田明美氏に原稿の確認をいただいた。感謝いたします。

(山田敏弘)